

A Study of the Present Situations and Problems on Teaching Dance in J. and S. High School in Ishikawa Pre.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/598

中学校・高等学校における ダンス指導の現状と課題

—石川県を対象として—

吉川京子

A Study of the Present Situations and Problems on Teaching Dance in Junior and Senior High School in Ishikawa Prefecture

Kyoko YOSHIKAWA

はじめに

平成元年度の学習指導要領の改訂に伴い、中学校、高等学校の保健体育では、「体操」以外の運動領域において、生徒が能力・適正等に応じて選択履修できるようになり、武道、ダンスにおいては、男女とも選択して履修できるようになった。それに伴い、領域内での選択も可能になり、創作ダンスかフォークダンスを選択することが可能になり、その他のダンスも扱ってもよいことになった。これまで、わが国のダンス学習内容は、創作ダンスを中心とし、フォークダンスとの2本立てが続いており、それ以外の多様なダンスが制度的に学習内容に取り入れられるのは、戦前・戦後を通じて舞踊教育史上初めてのことである。

学校ダンスは、戦後、創作ダンスを内容とし、与える教育から引き出す教育へといち早くその全人教育としての理想を掲げたものの、方法論の確立が遅れたために、指導者・学習者両面から敬遠されがちな領域とされてきた。しかし、近年、松本らの研究²⁾により提唱された舞踊課題学習指導法の実践により、課題学習の有効性が検証されてきた⁶⁾⁷⁾。

このような状況の中で、学校教育におけるダンス指導の現状及び教員のダンスに対する意識を把握することは、今後の教員養成大学におけ

るダンス教育を考える上で必要であろう。

教員養成大学は、地域の学校教育と密接に関わっており、更に、現職教員の再教育機関としての責務も果たす必要がある。従って、地域の学校教育及び教員の実状を把握することは重要である。

本研究では、石川県の中学校・高等学校における、体育教員のダンスに対する意識及び指導の実態を明らかにし、ダンス指導実践に関わる問題点を明らかにすることを目的とする。

I. 方法

1. 対象：石川県内の公立中学校教員127名
石川県内の公立高等学校教員57名

表1 調査対象

No.	都 市	中 学 校			高 等 学 校		
		学校数	配布数	回収率	学校数	配布数	回収率
1	加賀市	5	10	7.70 %	4	8	6.75 %
2	江沼郡	1	2	0.0 %	0	0	0.0 %
3	小松市	10	20	11.55 %	6	12	7.58.3%
4	能美郡	4	8	6.75 %	1	2	2.100 %
5	石川郡	10	20	13.65 %	2	4	4.100 %
6	松任市	4	8	6.75 %	2	4	0.0 %
7	金沢市	23	46	26.56.5%	13	26	16.61.5%
8	河北郡	6	12	7.58 %	3	6	0.0 %
9	羽咋市	2	4	4.100 %	3	6	5.83.3%
10	羽咋郡	5	10	5.50 %	3	6	3.50 %
11	七尾市	6	12	9.75 %	5	10	1.10 %
12	鹿島郡	6	12	10.83.3%	3	6	3.50 %
13	輪島市	6	12	8.66.7%	3	6	3.50 %
14	鳳至郡	9	18	7.38.9%	5	10	5.50 %
15	珠洲市	6	12	5.41.7%	2	4	2.50 %
16	珠洲郡	2	4	3.75 %	0	0	0.0 %
	計	105	210	127.60.5%	55	110	57.51.8%

2. 調査期間：平成3年11月11日～30日

3. 調査方法：郵送による質問紙調査

石川県内の公立中学校・高等学校全校（養護学校・聾学校を除く）の校長宛に男女各1名の体育教師に対する質問紙調査を郵送により依頼した。中学校は、学校数105, 配布数210, 回収数127, 回収率60.5%であった。高等学校は、学校数55, 配布数110, 回収数57, 回収率51.8%であった（表1）。

4. 調査内容

調査項目は、以下の4つの視点から構成した。

- (1) 対象者の属性：性別, 年齢, 教職年数, 専攻教科, 専門実技種目
- (2) ダンス経験：学校教育におけるダンス履修経験
- (3) ダンスに対する意識：ダンスの好き嫌い, ダンスの指導観, ダンスの教材観
- (4) 創作ダンスの大学時履修経験：履修期間, 履修前後の変化, 履修後の印象
- (5) 創作ダンス指導の現状：指導実践, 指導の好き嫌い, 授業計画能力, 指導の障害, 習得希望, 講習会への参加, 授業研究

5. 分析方法

分析には、PC-9801VX を使用し、データ解析ソフト HALBAU を用いて、カテゴリの頻度を求め、クロス集計、 χ^2 検定を行った。有意水

準は、5%とし、フィッシャーの直接確率を用いた。

Ⅱ. 結果及び考察

1. 対象者の属性

表2に対象者の属性を示した。

1) 性別

男女比は、中学校では、男性59.8%、女性40.2%、高校では、男性49.1%、女性50.9%であり、高校は、男女ほぼ同数であったが、中学校では、男性の割合が1割程多かった。男女比を等しくするために、各校男女各1名の回答を依頼したが、中学校では、男性の割合が高くなった。この理由として、女性の体育教師不在と回答した中学校が5校見られたことが上げられ、中学校では、男性教員のみで体育を担当している学校があることが窺える。高校でも、男性のみと回答した学校が1校見られた。

2) 年齢

年齢は、中学校では、30歳代が48.0%と約半数を占め、続いて20歳代が27.6%、40歳代が17.3%、50歳代が7.1%であった。高校では、30歳代が33.3%で1/3を占め、続いて、40歳代が24.6%、20歳代と50歳代が21.1%とほぼ同じような割合であった。中学校では、20歳代・30歳代で75.6%となり、本調査では若い年代の教師の実状が反映され则认为られる。高校では、年齢の偏りが少ないので各年齢層を反映すると考えられる。

3) 教職年数

教職年数は、中学校では、5-9年が26.0%、10-14年が24.4%で、5-14年の教員で約半数を占めている。高校では、15-19年が21.1%、5-9年が19.3%、25-29年が15.8%と教職経験の浅い者から深い者まであまり偏りがみられない。

4) 専攻教科

専攻教科は、中学校では、保健体育専攻が84.3%、保健体育以外の専攻の教員も10.2%見られた。高校では、無回答の1名を除いて全て保健体育専攻であった。

表2 対象者の属性

項目	人数(%)	
	中学校	高等学校
有効回答数	127(100.0)	57(100.0)
性別		
男性	76(59.8)	28(49.1)
女性	51(40.2)	29(50.9)
年齢		
20歳	35(27.6)	12(21.1)
30歳	61(48.0)	19(33.3)
40歳	22(17.3)	14(24.6)
50歳	9(7.1)	12(21.1)
教職年数		
0～4年	20(15.7)	8(14.0)
5～9年	33(26.0)	11(19.3)
10～14年	31(24.4)	6(10.5)
15～19年	18(14.2)	12(21.1)
20～24年	14(11.0)	5(8.8)
25～29年	8(6.3)	9(15.8)
30年以上	3(2.4)	6(10.5)
専攻教科		
保健体育	107(84.3)	56(98.2)
その他	13(10.2)	0
不明	7(5.5)	1(1.8)
専門実技種目		
ダンス	4(3.1)	3(5.3)
体操	0	1(1.8)
器械運動	4(3.1)	3(5.3)
陸上競技	24(18.9)	7(12.3)
球技	48(37.8)	24(42.1)
武道	12(9.4)	6(10.5)
水泳・スキー	7(5.5)	1(1.8)
その他	5(3.9)	10(17.5)
無不明	6(4.7)	0
不明	17(13.4)	2(3.5)

5) 専門実技種目

専門実技種目は、中学校では、球技が37.8%と最も多く、次は、陸上競技で18.9%、続いて、武道が9.4%であり、この3種目で約2/3を占めている。ダンスは、3.1%であった。高校でも、球技が42.1%と最も多く、その他が17.5%いるものの、次は、陸上競技で12.3%、続いて、武道が10.5%であり、この3種目で約2/3を占めている。ダンスは、5.3%であった。高校では、その他が多かったことより、専門実技種目が多岐に渡っていると考えられる。

2. ダンス経験

小学校、中学校、高等学校、大学においてダンスの授業を受けた経験のある教員の割合を示したものが、図1である。

小学校におけるダンス経験は、中学校教員の14.2%、高校教員の5.3%、中学校におけるダンス経験は、中学校教員の25.2% (女性51.0%、男性7.9%)、高校教員の15.8% (女性27.6%、男性3.6%)、高校におけるダンス経験は、中学校教員の18.9% (女性39.2%、男性5.3%)、高校教員の28.1% (女性51.7%、男性3.6%)、大学におけるダンス経験は、中学校教員の44.1% (女性62.7%、男性31.6%)、高校教員の56.1% (女性86.2%、男性25%)であった。中学校教員では、高校でのダンス経験が落ち込んでいるものの、小、中、高、大と進むにつれ、授業時でのダンス履修経験のある者が増加していることがわかる。

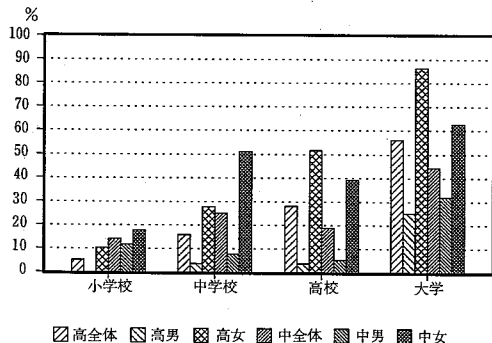


図1 ダンス経験

性別に見ると、中学校教員、高校教員共に、中、高、大におけるダンス経験において、男女間に有意差が認められた。従って、女性に比べ男性教員は、中学校、高校、大学の授業でのダンス経験が少ないと言える。これは、平成元年度の指導要領の改訂以前では、中高では、ダンスは主として女子に指導することとなっていたためと考えられるが、一方、女性においても、中学校教員では、中学で約5割、高校で約6割、高校教員では、中学で約3割、高校で約5割が、ダンスの授業を受けた経験がなく、大学においても中学校教員では、約4割、高校教員では、約1.5割は、未経験であることがわかる。

3. ダンスに対する意識

(1) ダンスの好き嫌い

ダンスの「踊る」「創る」「観る」活動それぞれに対する好き嫌いを示したものが、図2である。

「踊ることは好き」は、中学校教員の40.2% (女性60.8%、男性26.3%)、高校教員の33.3% (女性48.3%、男性17.9%)、「創ることは好き」は、中学校教員の9.4% (女性13.7%、男性6.6%)、高校教員の10.5% (女性13.8%、男性7.1%)、「観ることは好き」は、中学校教員の40.2% (女性51.0%、男性32.9%)、高校教員の47.4% (女性62.1%、男性32.1%)、「どれも嫌い」は、中学校教員の4.7% (女性2.0%、男性6.6%)、高校教員の7.0% (女性0%、男性14.3%)「どちらとも言えない」は、中学校教員の27.6% (女

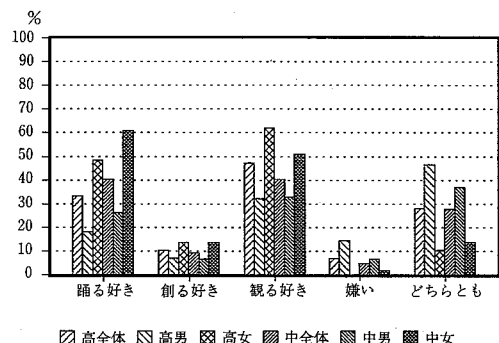


図2 ダンスの好嫌

性13.7%，男性36.8%），高校教員の28.1%（女性10.3%，男性46.4%）であった。「どれも嫌い」な教員が少ない一方、「踊ること」、「観ること」に比べ、「創ること」が好きな教員が少ないことが窺える。

性別に見ると、中学校教員、高校教員共に、「踊ることが好き」、「観ることが好き」、「どちらとも言えない」において、男女間に有意差が認められた。従って、「踊ることが好き」、「観ることが好き」は、男性に比べ女性教員に多く、「どちらとも言えない」は、女性に比べ、男性教員に多いと言える。この差は、ダンス経験の違いに起因しているのではないかと推察される。

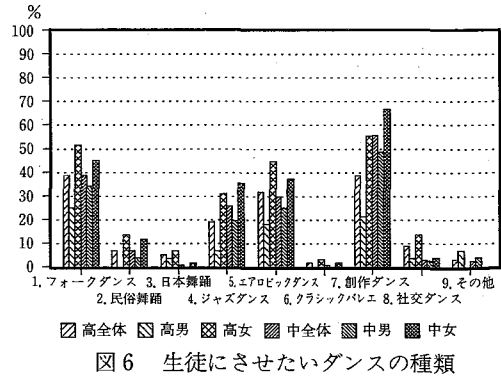
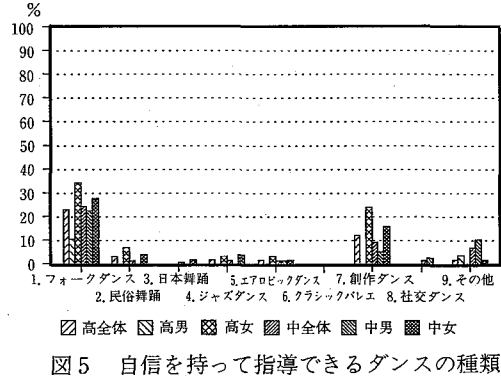
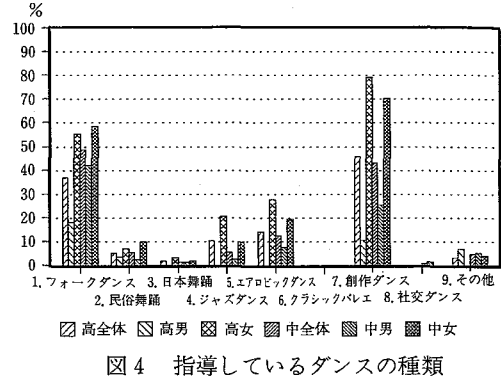
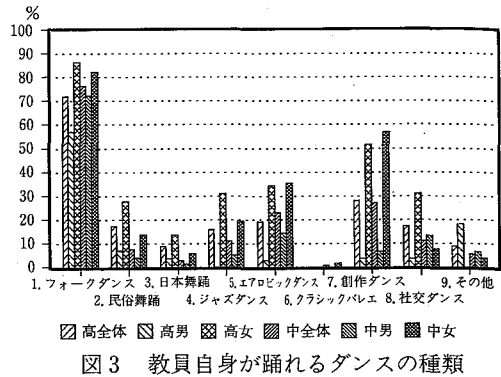
(2) ダンスの指導観

教員自身が踊れるダンスの種類、指導しているダンスの種類、自信を持って指導できるダンスの種類、生徒にさせたいダンスの種類、各々について示したものが、図3-図6である。

教員自身が踊れるダンスは、フォークダンスが最も多く、中学校教員の76.4%（女性82.4%，男性72.4%），高校教員の71.9%（女性86.2%，男性57.1%）であった。次が、創作ダンスで、中学校教員の26.8%（女性56.9%，男性6.6%），高校教員の28.1%（女性51.7%，男性3.6%）であり、続いて、エアロビックダンスで、中学校教員の22.8%（女性35.3%，男性14.5%），高校教員の19.3%（女性34.5%，男性3.0%）であった。フォークダンスは、約3/4の教員が踊れるものの、次の創作ダンスは、約1/4の教員しか踊れないことが窺える。

性差が認められたのは、中学校教員、高校教員共に、ジャズダンス、エアロビックダンス、創作ダンスであり、その他に、高校教員では、フォークダンス、社交ダンスにも認められた。従って、これらのダンスは、男性に比べ、女性に、踊れる教員が多いと言える。

指導しているダンスは、中学校教員では、フォークダンスが最も多く48.8%（女性58.8%，男性42.1%），高校教員では、創作ダンスが最も多く45.6%（女性79.3%，男性10.7%）であっ



た。次は、中学校教員では、創作ダンスで43.3%（女性70.6%，男性25.6%），高校教員では、フォークダンスで36.8%（女性55.2%，男性17.9%）であり，中高共に，エアロビックダンスがそれに続き，中学校教員では，12.6%（女性19.6%，男性7.9%），高校教員では，14.0%（女性27.6%，男性0%）であった。中学校，高校共に，創作ダンスを，約1/2の教員が指導しており，女性教員においては約3/4が指導していることが窺える。

性差が認められたのは，中学校教員，高校教員共に，創作ダンスであり，その他に，高校教員では，フォークダンス，ジャズダンス，エアロビックダンスにも認められた。従って，これらのダンスは，男性に比べ，女性に，指導している教員が多いと言える。

自信を持って指導できるダンスは，フォークダンスが最も多く，中学校教員の24.4%（女性27.5%，男性22.4%），高校教員の22.8%（女性34.5%，男性10.7%）であり，次が，創作ダンスで，中学校教員の9.4%（女性15.7%，男性5.3%），高校教員の12.3%（女性24.1%，男性0%）であった。自信を持って指導できるダンスは，最も多いフォークダンスでさえも，中学校，高校共に，約1/5の教員しかおらず，創作ダンスにおいては，約1/10であり，ダンス指導に自信のない教員が多いことが窺える。

性差が認められたのは，高校教員における創作ダンスのみであった。従って，高校教員においては，男性に比べ，女性教員は，創作ダンス指導に自信を持っていると言える。しかし，中学校教員においては，自信を持って指導できるダンスは，男性教員と女性教員に違いが見られないと言える。

生徒にさせたいダンスは，中学校教員では，創作ダンスが最も多く55.9%（女性66.7%，男性48.7%），次が，フォークダンスで38.6%（女性45.1%，男性34.2%）であり，高校教員では，創作ダンス，フォークダンス共に最も多く38.6%（女性55.2%，51.7%，男性21.4%，

25.0%）であった。中高共に，その次が，エアロビックダンスであり，中学校教員の29.9%（女性37.3%，男性25.0%），高校教員の31.6%（女性44.8%，男性17.9%），続いて，ジャズダンスで，中学校教員の26.0%（女性35.3%，男性19.7%），高校教員の19.3%（女性31.0%，男性7.1%）であった。中学校においては，約1/2の教員が生徒に創作ダンスをさせたいと考えていることが窺える。高校教員においては，女性教員の1/2以上が創作ダンスをさせたいと考えている一方で，男性教員は約1/5しか考えていないことが窺える。

性差が認められたのは，高校教員における，ジャズダンス，エアロビックダンス，創作ダンスであった。従って，高校教員においては，男性に比べ，女性教員は，これらのダンスを生徒にさせたいと考えていると言える。しかし，中学校教員においては，生徒にさせたいダンスは，男性教師と女性教師で違いが見られないと言える。

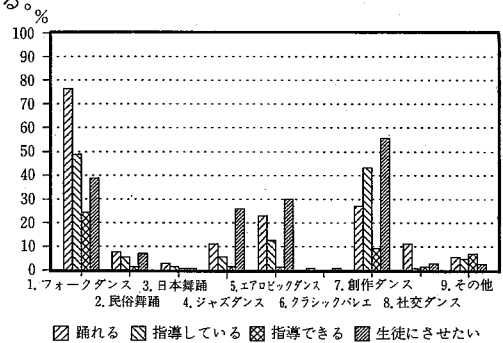


図7 ダンスの種類 (中学校)

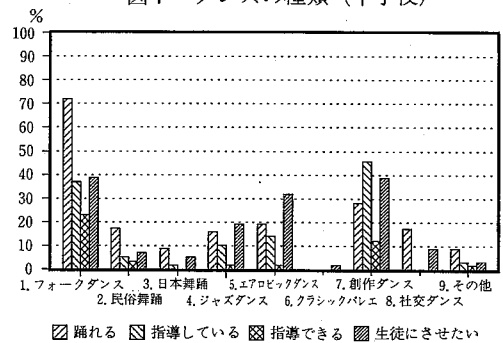


図8 ダンスの種類 (高校)

以上より、中学校、高校共に、教員自身が踊れるダンス、指導しているダンス、自信を持って指導できるダンス、生徒にさせたいダンスのいずれにおいても、フォークダンス、創作ダンスが上位を占め、これに、エアロビックダンスが続いているが、自信を持って指導できる教員が少ないことが窺える。また、フォークダンスにおいては、踊れる教員が最も多く、中学校教員では、指導している、生徒にさせたい、高校教員では、生徒にさせたい、指導している、という順となり、最も少ないのが、指導できるであるが、創作ダンスにおいては、中学校教員では、生徒にさせたいが最も多く、指導しているがこれに続き、高校教員では、指導しているが最も多く、生徒にさせたいがこれに続き、両者共、その次は、踊れる、指導できるの順となっている。従って、フォークダンスでは、生徒にさせたい、指導している教員に比べ、踊れる教員が多いのに対し、創作ダンスでは、踊れる教員に比べ生徒にさせたい、指導している教員が多いことがわかる (図7, 図8)。

(3) ダンスの教材観

ダンスは生徒にとって大切だと考えている教員は、中学校では91.3% (女性94.1%, 男性89.5%) 高校では、80.7% (女性86.2%, 男性75%) であり、中学校教員、高校教員共に、性差は認められなかった (図10)。男女教員共に、約9割がダンスは生徒にとって大切であると認識している。大切な理由として、中学校教員では、1) 「想像性、創造性豊かな人間を育てる」(14.7%), 2) 「リズムにのって体力づくりができる」(11.2%), 3) 「表現・伝達の喜びを体験できる」(9.5%), 4) 「感情を豊かにする」(8.6%), 5) 「身体を知覚できる」(6.9%), 6) 「仲間との共感の時間が持てる」(6.0%) が上位であり、高校教員では、1) 「リズムにのって体力づくりができる」(17.4%), 2) 「仲間との共感の時間が持てる」(15.2%), 3) 「感情を豊かにする」(13.0%), 4) 「想像性、創造性豊かな人間を育てる」(10.9%) が上位であり、中

学校教員、高校教員共にこれらの理由で教員の1/2以上を占めていた。高校教員に比べ、中学校教員は、教員によって、ダンスの価値を多様に捉えている傾向が窺える。

しかし、体育の中でダンスを重視している教員は、中高共に、14.2% (女性25.5%, 男性6.6%) であり (図10)、少ないことが窺える。重視していない理由として、「自分に体験がない」ことを挙げた教員が、中学では69.7%, 高校では21.4% 見られた。

中高共に、男女間に有為な差が認められ、男性に比べ、女性教員は、ダンスを重視していると言える。

4. 創作ダンスの大学時履修経験

(1) 履修期間

図9に創作ダンスの大学時履修期間を示した。

大学の授業で創作ダンスの履修経験が1年以上ある教員は、中学校では33.9% (女性76.5%, 男性5.3%), 高校では52.6% (女性96.6%, 男性7.1%), 1年未満の教員は、中学校では26.8% (女性13.7%, 男性35.5%), 高校では14.0% (女性0%, 男性28.6%), 履修経験が全くない教員は、中学校では、39.4% (女性9.8%, 男性59.2%), 高校では、33.3% (女性3.4%, 男性64.3%) であった。男女間に有意な差が認められ、男性は経験が全くない教員が多いのに対し、女性は、1年以上の経験がある教員が多い。

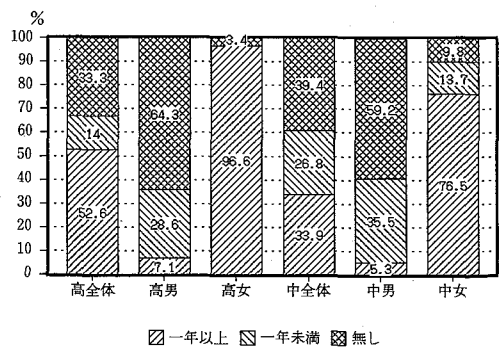


図9 履修期間

(2) 履修後の意識の変化

履修前後で創作に対する興味・関心・価値観がプラスに変化した教員は、中学校では51.9% (女性54.3%, 男性48.4%), 高校では60.5% (女性64.3%, 男性50.0%)であり, 中高共に, 1/2以上の者に, 肯定的変容をもたらしていることが窺える。男女間に有意な差は認められなかった。

履修後の印象は, 中学校教員では, 1)「創作する難しさ」(18.2%), 2)「自分を外に表現できるすばらしさ」(9.1%), 3)「作品を創り上げた満足感・達成感」(7.8%)が上位であり, 高校教員では, 1)「作品を創り上げた満足感・達成感」(21.1%), 2)「創作する難しさ」(15.8%), 3)「自分を外に表現できるすばらしさ」(13.2%)が上位を占めた。中学校教員, 高校教員で, 順位は異なるものの上位に挙げられた印象は同じであった。

更に, 履修期間別に見ると, 履修期間が1年以上の教員は, 中高共に, 履修後の印象に, 「作品を創り上げた満足感・達成感」(中11.6%, 高23.3%)を挙げる者が最も多く, 1年未満の教員は, 中学校では, 「創作する難しさ」(29.4%), 高校教員では, 「表現するのは恥ずかしい・人目が気になる」(25.0%)を挙げた者が最も多く, 履修期間の違いにより, 印象が異なり, 履修期間が長いと満足感・達成感といった肯定的印象が得られ, 短いと困難さ・恥ずかしさといった, 否定的印象となっていることが窺える。高校教員において, 履修期間の違いによる履修後の印象には有意な差が認められた。従って, 高校教員においては, 履修期間が1年以上と1年未満の教員では, 履修後の印象が異なっていると言える。

5. 創作ダンス指導の現状

(1) 創作ダンスの指導実践

表3に創作ダンスの指導実践状況を示した。

創作ダンスが組み込まれているカリキュラムは, 「授業として」が, 中学で59.8%, 高校で

61.4%, 「運動会の中に」が, 中学で29.0%, 高校では見当たらず, 「行事などで」が, 中学で14.2%, 高校で3.5%であり, 「無し」は, 中学で15.0%, 高校で35.1%であった。中高共に, 約6割が授業に組み込まれており, その他に, 中学校では, 運動会, 行事にも取り入れていることがわかる。しかし, 全く組み込まれていない学校が, 中高共に見られ, 特に高校では, 約1/3で行われていない。

一方, 創作ダンスの発表会を学校単位で行っている学校が, 中学で11.8%, 高校で19.8%見られ, 学年単位, 授業の中で行っている学校も含めると, 中学では60.6%, 高校では, 47.4%の学校が何らかの形でダンス発表会を実施していた。

創作ダンスの年間授業時間は, 10-15時間が中学校では52.3%, 高校では76.1%で半数以上を占めた。

表3 創作ダンスの指導実践

		(%)	
項目		中学	高校
カリキュラム	授業	59.8	61.4
	運動会	29.0	0
	行事	14.2	3.5
	無し	15.0	35.1
発表会	授業	32.3	26.3
	学年単位	16.5	1.8
	学校単位	11.8	19.3
	その他	5.5	0
	無し	36.2	49.1
年間時間	16時間以上	13.8	4.8
	10-15時間	52.3	76.1
	10時間未満	33.8	19.0

この1年間に創作ダンスの授業を実践した教員は, 中学校では51.2% (女性76.5%, 男性34.2%), 高校では36.8% (女性55.2%, 男性17.9%)であった(図10)。男女間に有意な差が認められ, 男性に比べ, 女性教員の授業実践が多いと言える。中学では, 女性教員の約3/4が実践しており, 男性教員においても, 約1/3が実践しているが, 高校では, 女性教員においても約1/2しか実践しておらず, 中学に比べ創作ダンスの授業を行っている教員が少ないことが窺える。

(2) 創作ダンス指導の好き嫌い

創作ダンスの指導が好きな教員は, 中学では

33.9% (女性45.1%, 男性26.3%), 高校では15.8% (女性17.2%, 男性14.3%) であり (図10), 嫌いな教員は, 中学では55.1% (女性49.0%, 男性59.2%), 高校では68.4% (女性69.0%, 男性67.9%) であり, 約2/3の教員が, ダンス指導を敬遠していることがわかる。男女間に有為な差は認められず, 男性教員, 女性教員において創作ダンス指導の好き嫌いには違いが見られないと言える。中学校においては, 女性教員の約1/2が創作ダンス指導に好意を示していたのに対し, 高校では女性教員の約1/5であり, 女性教員においては, 中学校教員に比べ, 高校教員に創作ダンス指導に抵抗を感じている教員が多いことが窺える。

指導が好きな理由としては, 1)「子供の生き生きとした表現に触れ素晴らしさを味わえる」(中学44.2%, 高校22.1%), 2)「ダンス経験から楽しさや素晴らしさを知っている」(中学16.3%, 高校22.2%) を挙げた教員が多く, 自らの楽しいダンス経験や, 指導を通して触れられる生き生きとした表現が, 指導の原動力となっていると考えられよう。

(3) 指導実践上の問題

①授業計画能力

創作ダンスの授業計画を組むことのできる教員は, 中学校では34.6% (女性64.7%, 男性14.6%), 高校では47.4% (女性69.0%, 男性25.0%) であり (図10), 中高共に男女間に有意な差が認められ, 女性教員では, 約2/3が授業計画を組むことができるが, 男性教員では, 授

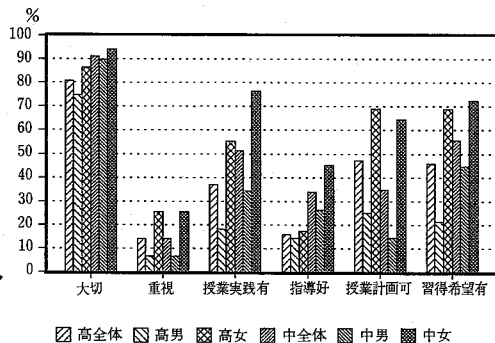


図10 創作ダンス指導

業計画を組むことができる教員が女性教員に比べ少ないと言える。

②指導の障害

創作ダンス指導に取り組む際の障害として, 中学校教員では, 1)「自分で動いてみせられない」(15.7%), 2)「生徒が動かない」(11.1%), 3)「自分自身あまり好きでない」(7.9%)が上位であり, 高校教員では, 1)「生徒が動かない」(15.8%), 2)「自分自身あまり好きでない」(12.3%), 3)「男女教員構成のアンバランス」(5.3%)が上位であった。順位は異なるものの, 中高共に「教員側」, 「生徒側」の両者に障害を捉えており, その他に「環境面」での障害も存在していることが窺える。「教員側」の障害を挙げている者は, 中学校では37.8% (女性41.2%, 男性35.5%), 高校では29.8% (女性27.6%, 男性32.1%) であり, 「生徒側」は, 中学校では16.5% (女性21.6%, 男性13.2%), 高校では17.5% (女性17.2%, 男性17.9%), 「環境面」は, 中学では11.0% (女性2.0%, 男性5.3%), 高校では8.8% (女性3.4%, 男性7.1%) であり (図11), 中高共に, 創作ダンス指導の障害は教員側にあると捉えている教員が最も多い。男女間に有意な差は認められなかった。

③習得希望

創作ダンスの指導で, 今後身につけたいことがある教員は, 中学校では55.9% (女性72.5%, 男性44.4%), 高校では45.6% (女性69.0%, 21.4%) であり (図10), 中高共に, 男女間に有意な差が認められ, 男性に比べ女性教員にお

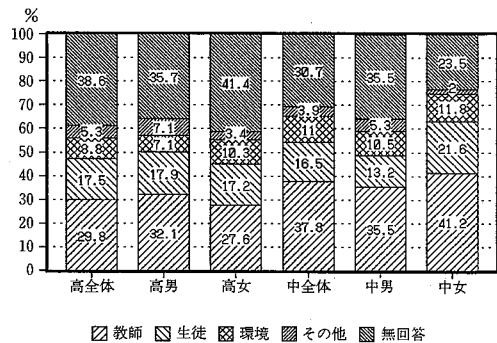


図11 指導の障害

る習得希望者が多いと言える。一方、中学校教員においては、男性教員においても、約半数が習得を希望していることが窺える。

習得希望内容は、中学校教員では、1)「本人の実技能力を高める」(33.8%), 2)「助言の仕方」, 「指導計画の立て方」(11.3%)が上位であり、高校教員では、1)「助言の仕方」(19.2%), 2)「本人の実技能力を高める」(11.5%), 3)「指導計画の立て方」, 「児童・生徒の題材の選び方」, 「視聴覚教材を使用しての指導」(7.7%)が上位であった。順位は異なるものの、中高教員共に、本人の実技能力の向上と指導法の両者を希望していることが窺える。

4) 研修

過去1年間にダンスの講習会に参加したことのある教員は、中学校では22.0%(女性54.9%, 男性0%), 高校では33.3%(女性65.5%, 男性0%)で、中高共に女性教員のみであり、1/2以上が参加していることがわかる。

創作ダンスの研究指定校または研究テーマにしたことのある教員は、中学では3.1%(女性7.8%, 男性0%), 高校では12.3%(女性20.7%, 男性3.6%)であった。

6. 大学時履修経験が与える影響

以上の結果より、ダンスに対する意識及び創作ダンス指導の現状には、男女教員間に多くの差が認められた(表4, 5)。この差は、履修経験の違いによるものとも考えられる。そこで、大学時履修経験の違いによる比較を行った。

大学での履修経験の違いによるダンスの好き嫌いを示したのが、図12である。

履修経験の違いにより有為な差が認められたのは、中高共に、「踊ることは好き」と「どちらともいえない」であり、更に、中学校教員においては、「創ることは好き」においても認められた。「踊ることは好き」は、履修経験が1年以上の教員では(中学55.8%, 高校46.7%), 1年未満では(中学35.3%, 高校37.5%), 無しでは(中学30.0%, 高校10.5%)であり、中学校教員では、1年以上と1年未満の間に、高校教員では、無しと1年未満の間の差が大きく、「創ることは好き」は、履修経験が1年以上の教員では(中学18.6%), 1年未満では(中学5.9%), 無しで

表4 性差及び履修経験による差

(*: p<0.05)

項目	性修		履修	
	中高	中高	中高	中高
踊ること好き	*	*	*	*
創ること好き	*	*	*	*
観ること好き	*	*		
どれも嫌い				
どちらとも	*	*	*	*
ダンスは大切	*	*	*	*
ダンスを重視	*	*	*	*
履修後の変化				
授業実践	*	*	*	*
指導の好き嫌い	*	*	*	*
授業計画能力	*	*	*	*
指導の障害	*	*	*	*
習得希望	*	*	*	*
講習会	*	*	*	*
研究	*	*	*	*

表5 性差及び履修経験による差(ダンスの種類)

(*: p<0.05)

種類	踊れる		指導している		指導できる		生徒にさせたい	
	性差		履修		性差		履修	
	中高	中高	中高	中高	中高	中高	中高	中高
フォークダンス	*	*	*	*				
民俗舞踊		*	*	*				
日本舞踊		*	*	*				
ジャズダンス	*	*	*	*			*	*
エアロビックダンス	*	*	*	*			*	*
クラシックバレエ							*	*
創作ダンス	*	*	*	*	*	*	*	*
社交ダンス	*	*	*	*	*	*	*	*
その他		*						

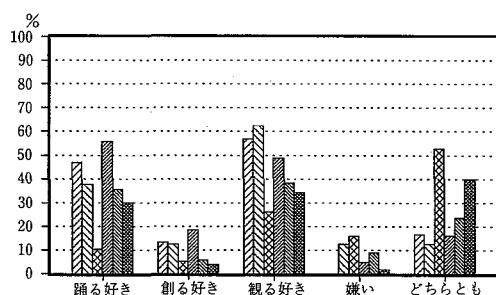


図12 履修経験の違いによるダンスの好嫌

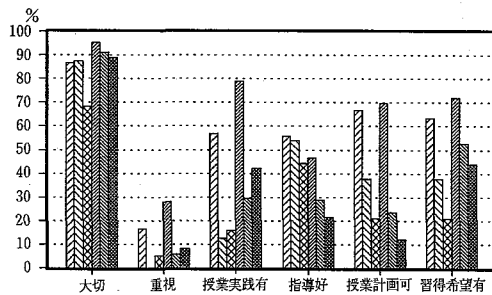


図13 履修経験の違いによる創作ダンス指導

は（中学4.0%）であり、1年以上と1年未満との差が大きく、「どちらともいえない」は、履修経験が1年以上の教員では（中学16.3%、高校16.7%）、1年未満では（中学23.5%、高校12.5%）、無しでは（中学40.0%、高校52.6%）であり、中高共に、無しと1年未満の間の差が大きく、これらの差が影響したと推察される。従って、履修経験及び期間の違いは、ダンス観及び踊ることに対する嗜好に影響を及ぼすと考えられる。「踊ることは好き」と「創ることは好き」は、履修経験が増加するに従って、「好き」になる傾向が窺え、逆に、「どちらともいえない」は、履修経験が増加するに従って減少する傾向が窺える。

図13には、履修経験の違いによる創作ダンス指導の現状を示した。

中高共に、「授業実践の有無」、「授業計画能力の有無」に有為な差が認められ、その他に、高校教員では、「習得希望の有無」においても有意な差が認められた。「この1年間で創作ダンスの授業の実践」は、履修経験が1年以上の教員では（中学79.1%、高校56.7%）、1年未満では（中学29.4%、高校12.5%）、無しでは（中学42.0%、高校15.8%）であり、「授業計画を組むことができる」のは、履修経験が1年以上の教員で（中学69.8%、高校66.7%）、1年未満では（中学23.5%、高校37.5%）、無しでは（中学12.0%、高校21.1%）であり、「習得希望がある」のは、履修経験が1年以上の教員で（高校63.3%）、1年未満では（高校37.5%）、無しでは（高校21.1%）であり、これらのどの項目においても、履修経験1年以上の教員と1年未満の教員の間の差が大きいことが窺える。従って、1年以上の履修経験が創作ダンスの授業実践及び授業計画能力に影響を及ぼすと考えられる。

Ⅲ. ダンス指導実践に関わる問題点

男女共に、中学校では約9割、高校では約8割の教員が、ダンスは生徒にとって大切だと認識しているにもかかわらず、重視している教員

は、女性が多く、それでもその約3割と少ない。重視していない理由に、体験がないということが、中学校教員では約7割、高校教員では約2割を占め、ダンス経験の機会の拡充が望まれる。

ダンスを嫌いな教員は、中高共に1割に満たず、男女共に抵抗は少ないと考えられるが、男女共に「踊ること」「観ること」に比べ、「創ること」を好む教員が少ない。ダンス学習は、「踊り」「創り」「観る」という3つの柱から成立しているが、「創ること」を好む教員が少ないということは、言い換えれば、創ることに抵抗を感じている教員が多いということになり、生徒に創る喜びを味わわせる上での障害となり得、ダンスの内在的価値の実現を生徒から奪う危険性をはらんでいる。これは、何に起因しているのかを検討し、対処する必要がある。「踊ること」「観ること」は、中高共に、女性教員の約5～6割が好意を示し、男性教員との差が見られた。一方、男性は、女性に比べ、明確なダンスへの嗜好を持っていない教員が多い。ということは、これからどのようにダンスと関わるかによって左右される可能性を持っており、今後の課題とされる。

教員が踊れるダンスは、中高共にフォークダンスであり、中学では約8割、高校では約7割と多くの教員が踊れる一方で、生徒にさせたいダンスののトップは創作ダンスであり、中学では6割、高校では4割、自身を持って指導できるダンスは、中学ではフォークダンス、高校では創作ダンスで、中高共に約2割しかおらず、指導に自身のない教員が多く、問題であろう。指導法の研究・研修が急務とされる。

創作ダンスは、中高共に約6割が授業としてカリキュラムに組まれていた。しかし、全国平均⁴⁾では、中高共に7割強であるので、石川県での創作ダンスの授業での取り組みは、全国に比べて低いと言え、何に起因するのか検討する必要がある。

年間授業時間については、文部省指導書⁵⁾の領域別時間の参考として、15%～（約16時間）と

例示されているが、中学では約1割、高校では1割にも満たず、特に高校では、全国平均⁴⁾の1/6であり、時間数の確保が必要とされる。

創作ダンスの大学時履修期間は、女性では、中学で約8割、高校で10割近くの教員が、1年以上であったのに対し、男性は、中高共に約6割の教員が全く履修経験がなかった。男性のダンス履修経験者が少ないということは、男性がダンス指導の担い手となりずらく、生徒にダンスプログラムを提供できない危険性を含む可能性があり、男性のダンス経験の機会を拡充する必要がある。

この1年間に創作ダンスの授業実践を行った教員は、中学では5割、高校では4割であり、1年以上の履修経験は、指導実践、指導計画能力に影響を及ぼすことが明らかになったため、ダンス指導実践力をつけるためには、教員養成大学のカリキュラムにおいて、1年以上のダンス履修期間を保証する必要がある。

中高教員共に、創作ダンス指導の障害は、教師側にあると捉えている教員が男女共に多く、習得希望を有している教員は、中学では約6割、高校では約7割であったことより、研修の機会を与えることが必要とされる。一方、この1年間に講習会へ参加した教員は女性のみであり、女性教員の、中学では約5割、高校では約7割と研修への熱意が窺われる。しかし、これまでに、授業研究を行ったことのある教員は、中学では1割に満たず、高校でも約1割と非常に少ない。講習会のみならず、自ら授業研究に取り組むことが課題とされよう。

付 記

本研究は、日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門・全国舞踊研究会が1991年度の研究プロジェクトとして実施した「ダンス指導実践に関わる

現職教員の意識」に関する全国調査の一部であり、石川県について分析したものである。全国舞踊研究会会員ならびに石川県内の各校調査協力者、関係各位に深く感謝いたします。

参考文献

- 1) 安藤幸, 中村久子: 表現運動指導の現状と問題点—四国小学校教員を対象として—, 鳴門教育大学研究紀要(生活・健康編), 9, 1-14, 1994.
- 2) 松本千代栄: 舞踊課題と創作学習—学習の共通課題の設定, 女子体育, 22, 8, 1980.
- 3) 松本富子, 高橋和子, 茅野理子, 細川江利子, 左分利育代, 廣兼志保, 畑野裕子: 現職教員のダンス指導実践に影響を及ぼす要因の検討—大学時履修経験が与える影響について—, 舞踊学, 16, 12-23, 1994.
- 4) 松本富子, 高橋和子, 茅野理子, 細川江利子, 左分利育代, 廣兼志保, 畑野裕子: ダンス指導の現状と課題, アジア国際舞踊会議発表論文集, 74-84, 1993.
- 5) 三浦弓杖: 舞踊教育で今何が問題か, 体育科教育, 6, 10-13, 1995.
- 6) 宮本乙女: 男女共修のダンス課題学習—中学校1年生, 日本体育学会大会号第40回大会号, 853, 1989.
- 7) 宮本乙女: 男女共修のダンス学習報告2—中学校1年生—, 日本体育学会第43回大会号, 862, 1992.
- 8) 文部省: 中学校指導書保健体育編, 1989.
- 9) 中村久子, 安藤幸: ダンス指導の現状と問題点—四国地区中学校教員を対象として—, 徳島大学総合科学部人間科学研究, 2, 1995.
- 10) 柴真理子: 創作ダンスの学習と自己実現, 人体科学, 1-(1), 79-88, 1992.
- 11) 鈴木江利子, 高橋和子, 川口千代, 吉川京子: ダンス指導実践に関わる現職教員の意識—高等学校を対象として—, 埼玉大学教育実践研究指導センター紀要, 8, 1995.